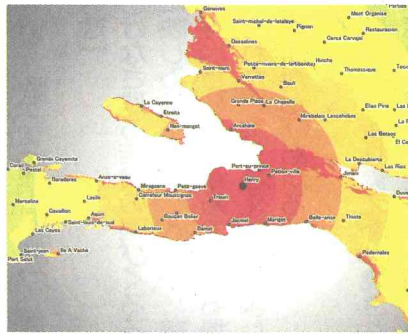


読賣新聞

2010年(平成22年)

1月24日 日曜日

中米ハイチで12日発生した大地震で、首都ポルトープランスなど震源に近い場所では、日本の気象庁の震度階級で「6強〜7」に相当する激しい揺れに襲われたことが、



ハイチ各地の推定震度図。強い揺れを示す色の濃い部分が、震源の東や北に広がっている(情報通信研究機構提供)

ハイチ地震 震度は6強〜7

日本の専門家らの解析で分かった。

米地質調査所(USGS)

が発表した震源付近の震度は、欧米で広く使われる「改訂メリカリ震度階級」で「9」。気象庁の震度階級だと5強〜6弱に当たるが、速報値のため、実際の震度より小さい可能性がある。

筑波大の八木准教授が、国際的な地震観測網で得られた地震波データに基づいて計算したところ、改訂メリカリ震度階級で「11・3」という結果だった。日本では6強

日本の専門家ら解析

〜7に相当する。1995年の阪神大震災や、2004年の新潟県中越地震の最大震度が7だった。

また情報通信研究機構(本部・東京都小金井市)の鄭炳表・専攻研究員らが、等高線データから推定される現地の地盤と地震波形を基に、ハイチ各地の推定震度分布を計算したところ、震源地近くでは、改訂メリカリ震度階級で「9以上」の地域が広がっていた。「場所によって、日本の震度7に相当する揺れもあったはず」と鄭研究員は話す。

八木准教授の解析によると、地震が起きたエンリキロ断層では約13キロの深さで岩盤の破壊が始まった。首都がある東方向に破壊が伝わり、約5秒後に地表に届いた。地震の際、岩盤破壊の進行方向では、揺れが強まることが知られている。

ハイチ地震は、地震の仕組みが阪神大震災とよく似ていると指摘されるが、八木准教授は「断層のずれの大きさは阪神の約2倍」と推定し、「ハイチでは、阪神よりも強い地震動が起きた可能性がある」

とみる。

エンリキロ断層は、ハイチの国土の南側をほぼ東西方向に250キロ、斜にわたって延びている。断層の南の地面は、北の地面より年約8ミリも速く動いているため、断層付近にひずみがたまりやすい。

この断層では、18世紀に2回、東側部分と西側部分で、大きな地震が起きている。だが今回動いたのは断層の東側部分だけで、西側はほとんど動いていない。京都大学地震予知研究センターの遠田晋次准教授は「ひずみの力の分布が変わり、西側の断層に影響を及ぼすことも考えられる。今後大地震の発生に注意が必要だ」と警告している。